

2022年6月20日

会報138号

かわち野に吹く風

東大阪文化財を学ぶ会

会長 南 光弘

歴史探訪 「飛鳥・檜前の終末期古墳を巡る」 ～八角形と星宿の世界～

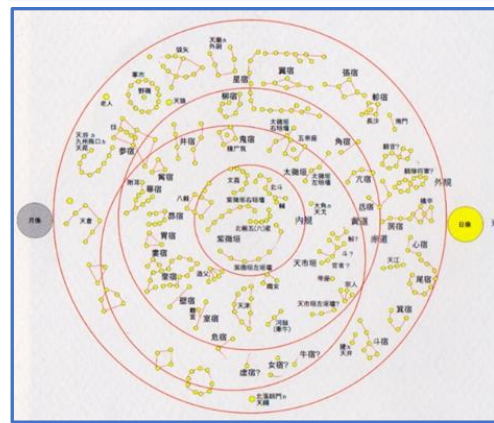
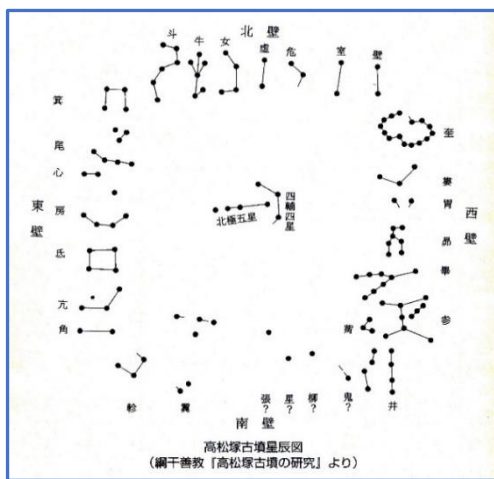
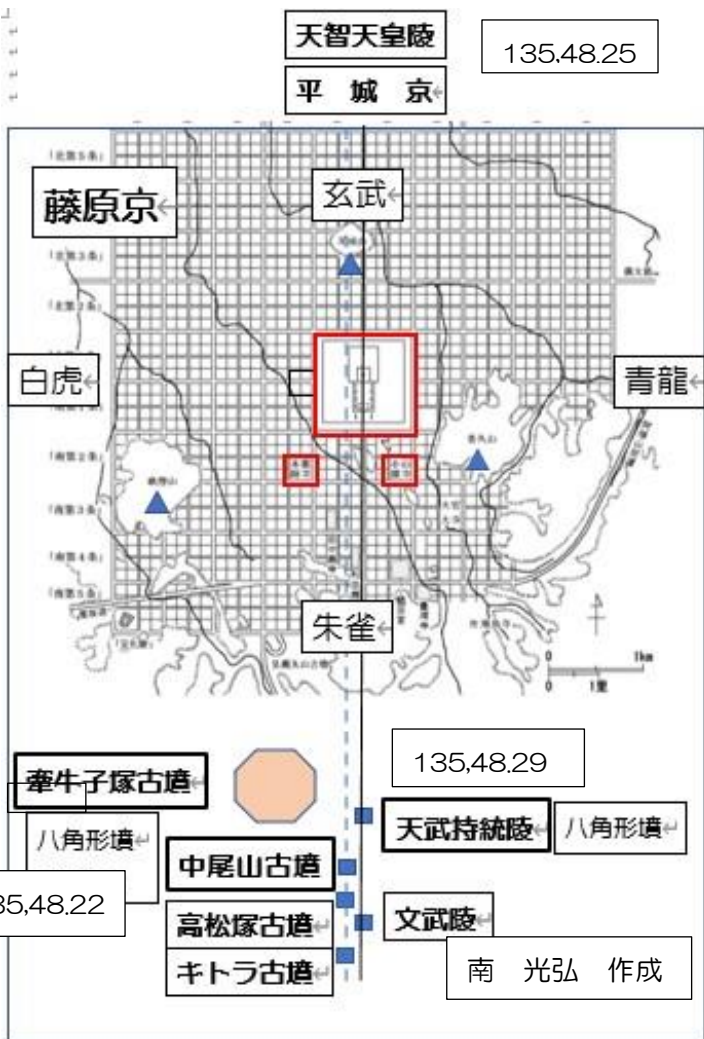
実施日 7月9日(土) 雨天決行(荒天中止)

1. 集合時間 受付、午前8時45分～ 集合 9時
2. 集合場所 近鉄 飛鳥駅
3. 昼食 弁当をご持参ください。近くに食堂などはありません。
4. 費用 250円(高松塚壁画館)
5. 行程

飛鳥駅→岩屋山古墳→越塚御門古墳→牽牛子塚古墳(復元)→大和国許世都比古命神社→吉備姫王墓(猿石)
 →欽明天皇陵→鬼の俎板・鬼の雪隠→(万葉歌碑)→天武・持統天皇陵→中尾山古墳→国営飛鳥歴史公園館→高松塚古墳・壁画館→(万葉歌碑)→文武天皇陵→於美阿志神社・檜隈寺跡→キトラ古墳・四神の館→壺阪山駅

*昼食、弁当を食べる場所は、国営飛鳥歴史公園館付近か高松塚付近を考えています。

※参加者はマスク着用をお願いします。また、新型コロナウイルスの感染状況によっては中止することがあります。ホームページ「歴史と街かど」をご覧ください必ず確認してください。



1 秒 = 約 25m
 1 分 = 約 1.6 km

天文図は、中央には北極五星と四鋪四星(しほしせい)からなる紫微垣、その周囲には二十八宿を表す。中央の紫微垣は天帝の居所を意味している。

飛鳥・檜前地域の古墳を簡単にまとめると

牽牛子塚古墳	八角形墳	対辺長約 22m 高さ 4.5m 以上	横口式石槨	夾紵棺・漆塗りの木棺
越塚御門古墳			横口式石槨	
桧隈大内陵	八角形墳	径 49m 高さ 7m	横口式石槨	夾紵棺 金銅製の外容器に銀の骨臓器
中尾山古墳	八角形墳	対辺長約 20m、高さ 4m 以上	横口式石槨	骨臓器
高松塚古墳	円墳	直径 23m 高さ 5m 石室長さ 265cm 幅 103cm 高さ 113cm	横口式石槨	漆塗りの木棺 四神図・白虎が南向き 男女群像図 星宿図（実際の位置に描かれていない）
キトラ古墳	円墳	直径 13.8m 高さ 3.3m 石室長さ 260cm 幅 100cm 高さ 130cm	横口式石槨	漆塗りの木棺 四神図・白虎が北向き（珍しい） 獣頭人身の十二支像 星宿図（実際の星座） 壁画の作者の最有力候補は、黄文連本実（きぶみのむらじほんじつ）
マルコ山古墳	多角形墳		横口式石槨	

《天武天皇・天淳中原瀛真人天皇（あまのぬなはらおきのまひとのすめらみこと）》

大海人皇子、後の天淳中原瀛真人天皇の「壬申の乱」（672年・1350前）は、用意周到に計画された「皇位篡奪」を意図した戦いであったと言われている。短期決戦で圧倒的に勝利した天皇（旧来の大王ではなく）は、「新益京」（藤原京）の造都の詔を發布したり、皇親による律令制度を整え時代を大きく変革した。

因みに、2022年は「壬申の乱」1350年であり、改めて「天武天皇」を考えるよい機会としたい。

《天武朝時代の治世》

(1) 「現人神」、「浄」くて神聖な天皇。

「大津皇」「天皇聚露弘寅」、天皇号木簡が飛鳥池遺跡から出土している。天皇を詠った歌、二首。

大君は 神にしませば 天雲の 雷の上に いほりせるかも 柿本人麻呂

大君は 神にしませば 赤駒の腹ばう田居を 都となしつ 大伴御行

そして、天武天皇の諡号は天淳中原瀛真人（あまのぬなはらおきのまひと）で、『天帝天皇』に擬える。

(2) 人民支配に必要不可欠な政策

まずは、「良賤制」、そして「殺生禁断令」「衣服令」「八色の姓」などを成立させている。天武10年（681）には、天下大解除を諸国に国造に命じ、「祓柱奴婢一口」を出させた。天下大解除は世の中の「穢れ」を奴婢＝賤民一身に集めさせ「清浄」な天皇を創りだした。

そして、天皇の晩年、元号を朱鳥（あかみとり）に定めた元年（686）7月20日に「飛鳥浄御原宮」と、宮号を正式に制定している。

なお、朱鳥は道教における生命の充実を意味しており、「気が枯れる」＝「穢」と対極的に捉えられていた。

(3) 天皇制中央集権国家を支えると律令制、

天武10年に浄御原令の編纂（へんさん）が開始される。日本号、天皇号は本令により法典に明記されたとする説が有力である。

太宰府国分松本遺跡から出土した笠志前国嶋評戸籍木簡は683～701年に作成されたと考えられ、大宝律令の制定（701）より早い段階で、中央集権国家の要となる戸籍関連の制度が確立されていたことがわかる。戸籍が6年に1回作成されており、税の徴収より徴兵を目的として編成されていることが読み取れている。また、浄御原令は、「立評」や50戸を1里とする地方制度、班田収授に関する規定などの律令制の骨格を定めている。

地方行政区画について、「大化の改新」（孝徳天皇・645年）の詔では、「郡」となっていたが、木簡は全て「評」表記。「大化改新」の詔とは何だったのか。

他に、大嘗祭を初めて執行し、無文銀錢に代わる富本錢の鑄造、占星台の設置と天文暦・具注暦（木簡出土）を採用、6500kmに及ぶ七道駅路の建設などがある。天武10年の「帝紀及上古諸事」の編纂詔勅、「国史」編纂に関わり紀元を儀鳳暦によって定めている。

斯うして天武天皇は人民、豪族を支配し、土地と経済そして、時空、歴史まで支配しようとしていた。
天武紀 12 年条に、

「其の天瑞（あまつみつ）は、政（まつりごと）を行ふ理（ことわり）、天道に協（かな）ふときには、応ふと。是に今朕が世に当りて、年毎に重ねて至る。」と、ある。

記事は天瑞、天道に言及しており、王が正しい政治を行はば、「天が瑞祥をもたらすに則った。天瑞が年毎に重ねて至るは、天が認めるところと」天皇の「日本国」は中国の天の思想に適っていることを謳っている。

① 岩屋山古墳

7 世紀中頃の終末期の古墳。石室に入り見学ができる。巨大な花崗岩を使用し、石室内部は精巧な切石加工がほどこされている。イギリス人のウィリアム・ゴランドが、古墳の石室を調査して「舌を巻くほど見事な仕上げと石を完璧に組み合わせてある点で日本中のどれ一つとして及ばない」と『日本のドルメンと埋葬墳』の中で紹介している。

墳丘は 1 辺約 40m、高さ約 12m の 2 段築成の方墳。墳丘は版築で築かれており、下段テラス面には礫敷が施されていることが明らかとなりました。埋葬施設については石英閃緑岩（飛鳥石）の切石を用いた南に開口する両袖式の横穴式石室。規模は全長 17.78m、玄室長 4.86m、幅約 2.8m、高さ約 3m で羨道長約 13m、幅約 2m、高さ約 2m。墳形は下段部が明らかに方形であるが、上段部を八角形に築いた八角墳ではないかという説もある。しかし、八角墳と言えば、飛鳥地域では天皇のみ許された古墳の形態。

② 牽牛子塚古墳（復元）・越塚御門古墳

令和 4 年（2022）3月に八角形の墳丘が復元公開されている。
平成 21 年（2009）の調査で対辺長約 22m 高さ 4.5m 以上の八角形墳で 3 段築成、墳丘周囲では外側を八角形にかこむ石敷遺構あることが判明している。

内部は、巨大な一つの凝灰岩をくり抜いて左右二室に造った横口式石槨で、他に例をみないほど精巧に造られており、天井は緩やかなドーム状の曲面をなしている。

この古墳も古く盗掘を受けている。大正 3 年の調査時に夾紵棺の破片、七宝飾金具、ガラス製丸玉、人骨片などが検出されている。石槨の構造、夾紵棺、古墳の位置等から天皇家を含めてその一族に連なる被葬者が推定される。被葬者は、齊明天皇と間人皇女という説が有力である。

また隣接、南東側で割り貫き式横口式石槨の越塚御門古墳が検出されている。大田皇女の陵墓とする説がある。宮内庁は、車木ケンノウ古墳（齊明天皇越智崗上陵）を齊明天皇陵として管理している。



③ 式内社（論社）・許世都比古命神社・五郎宮、

武内宿禰の御子神、許世都比古神を祀る神社であると考えられている。

『古事記』では武内宿禰の第二子。なぜ、五郎宮かといえは、「御霊」信仰の影響により「五郎」に転訛したものと考えられている。また、異説としての七子のうち特に優れ、大豪族の祖となる五子を「五郎」として祀ったともされている。因みに、武内宿禰の子は以下の通り。第 1 子 … 羽田矢代宿禰・波多氏、第 2 子 … 許勢小柄宿禰・巨勢氏、第 3 子 … 石川宿禰・蘇我氏、第 4 子 … 平群木菟宿禰・平群氏、第 5 氏 … 紀角宿禰・紀氏、第 8 子 … 葛城襲津彦・葛城氏。以上は大豪族の祖となった六氏。このうち羽田矢代宿禰を除く五氏であるとのこと。なぜ除いたのかは不明。

境内の碑文には、「武内宿禰の五柱に当りいまさばなるべし。」とある。また、「葛城の邑郷を賜りし」（許勢山口神社）ことが述べられており、巨勢地方の産土神で、巨勢氏の祖神でもある。巨勢氏の一族が後世その本拠の

巨勢郷から檜前方面に勢力を伸ばして「越」に新しくその租神の分霊を祀ったとも考えられる。

享和年間、此の地の服部氏（高取藩医）が人首蛇身の造形を奉納、弁才天の神体としたと伝える。

④ 吉備姫王墓（猿石）

斉明女帝の母、吉備姫王の墓とされている。吉備姫王は欽明天皇の孫でもあり、天智天皇・天武天皇の祖母にあたる。『日本書紀』には檀弓岡（まゆみのおか）に葬られたとあるが、『延喜式』諸陵寮には欽明天皇陵の御陵内に墓があると記され、現在の地と推定されている。

墓域内には、江戸時代に欽明天皇陵の近くの水田から掘り出され、その形から猿石と呼ばれる石造物6体のうち4体に移され、檜隈の猿石・山王権化（さんのうごんげん）と称されている。高取城入口にある猿石もこの仲間で、もとと同じ場所にあったと思われる。

⑤ 欽明天皇陵

墳丘は前方部を西に向け東西に正確に主軸をとった前方後円墳で、全長約 140m 後円部径 72m で、明日香村内では最大の古墳である。非常に多くの葺石があることでも知られている。現在は回りに水を湛えた周濠を持っているが、これは文久の修復で大幅に改築されたものであり元は田であった。なお、この修復の際に双円墳から前方後円墳に改造されたとする考えもある。

同古墳と平田岩屋古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓（天武・持統合葬陵）は同じ丘陵の南側の地形を利用して造られており、4つの古墳が東西に並んでいる。

《鬼の俎板・雪隠》

古墳の石棺式石室の一組の石材。現在では、欽明天皇陵の石室の底石と蓋と説明されている。

《万葉歌碑》

さ檜隈川の 瀬を速み 君が手取らば 言寄せむかも 作者不詳

⑥ 天武・持統合葬陵（檜隈大内陵・野口王墓）

現在の天武・持統合葬陵は円墳で周囲 190m径 49m高さ7m。もともとは八角形墳といわれている。

朱火宮煉形・八角形。道教では、朱鳥もしくは朱雀の象徴する南方、火の方角、道教の神学でいわゆる死者のよみがえりの宮。天武は病に得たとき「朱鳥」を元号として使っている。元号を朱鳥（あかみとり）に定めた元年（686）7月20日に「飛鳥浄御原宮」と、宮号を正式に制定している。

『日本書紀』によれば、壬申の乱に勝利した第40代天武天皇が亡くなったのは、朱鳥元年（686）9月9日である。場所は、飛鳥浄御原宮の正宮（おおみや）だった。殯宮が南の庭に建てられ、その月の24日から2年3ヶ月にも及ぶ長い殯が営まれた。檜隈大内陵の造営が開始されたのは、持統元年（687）10月22日。この日、皇太子の草津皇子は公卿・百官と諸国の国司・国造および百姓男女を率いて、大内陵の築造に着手したと『日本書紀』は記している。1年後の持統2年（688）11月、大内陵が完成した。その月の11日、当摩真人智徳（たぎまのみとちとこ）が殯宮で歴代天皇の皇位継承の次第を誅（しのびごと）し、その儀式の後で天皇の棺は大内陵に埋葬された。

一方、『続日本紀』によれば、持統上皇が58歳で亡くなったのは、大宝2年（702）12月22日だった。1年間の殯の後、大宝3年（703）12月17日に飛鳥岡で火葬され、その月の26日に大内陵に合葬された。天皇の火葬はこれが初の例であった。

『延喜式』諸陵寮には「檜隈大内陵、大和国高市郡に在り。兆域東西五町、南北四町、陵戸五廂。持統天皇、檜隈大内陵に合葬す。陵戸更に重ねて充てず」とある。このように、我が国古書はいずれも檜隈大内陵が天武天皇と持統天皇の合葬陵であることを明確に記している。それにもかかわらず、江戸時代から明治の初めにかけて、檜隈大内陵は文武天皇陵に治定され、五条野丸山古墳が天武・持統天皇陵に治定されていた。

檜隈大内陵が天武・持統天皇陵として再治定されたのは、明治 14 年（1881）になってからである。そのきっかけとなったのが、前の年に京都梶尾の高山寺から発見された「阿不幾乃山陵記（あおきのさんりょうき）」と呼ばれる記録である。

実は、檜隈大内陵は鎌倉時代の文暦 2 年（1235）に盗掘にあい、多数の副葬品が奪われた。そのことを知って、京に住む公家たちの間で大騒ぎになり、盗掘の様子を実地検分するため勅使が派遣された。「阿不幾乃山陵記」はその時の勅使の検分記録で、陵墓内の石室・棺の大きさ・形状などを詳しく記している。その内容は次のようである。

○陵は八角形で石壇の一周は一町程である。墳丘は五段で十株程の大きな樹木に覆われて森を形成している。
○南に面して石の門（羨道の入り口）があり、その門の前に石橋がある。盗人はこの石門をわずかに人が入る程度に切り開いて侵入した。

○御陵の内部は前後二室（羨道と玄室）から構成され、前室は方丈（3m）の大きさで、すべて瑠璃製である。天井までの高さは七尺、天井もすべて瑠璃である。

○後室は広さ南北 1 丈 4～5 尺、東西 1 丈程で、入り口に金銅製妻戸が設けられている。扉の厚さは 1 寸 5 分、高さ 6 尺 5 寸。扉の金物は六個、そのうち小さいものが 4、大きいものが二個あり、皆金である。その形は蓮華の花のようである。後室 3 方上下共に瑠璃製で赤く塗られている。

○御棺は張物で朱塗りである。（夾紵棺・きょうちょかん）長さは 7 尺、広さは 2 尺 5 寸、深さは 2 尺 5 寸ほどである。御棺の蓋は木製で、赤く塗られている。御棺を納めた床は金銅製で棺座の厚さは 5 分で、その上には透かし彫りが左右に 8 個ある。

○御骨の首は普通よりも大きく、赤黒色を呈している。脛の骨の長さ 1 尺 6 寸、肘骨は長さ 1 尺 4 寸。御棺の中には、紅い御衣装の朽ちたるものが少々存在した。

○盗人が取り残したものは橘寺へ移された。その中に玉帯一条あり、形は銀製兵庫鎖を使用して種々の玉で装飾する。石に 2 種類あり、形は連銭のようだ。表の石は長三寸、その色は水晶のようである。これが玉帯である。

○御枕には金の珠玉を飾り、唐様で言葉では表現できない。鼓の形をした金銅の桶が 1 個床にあり、その形は礼盤（らいばん、礼拝読経する仏前の高座）のようで鎖が少しと割り方が 1 つある。また、この他に念珠一連があり、琥珀を銅糸で繋いでいる。これは多武峰の法師が取り上げる。

また、檜隈大内陵の盗掘事件は、京でかなり話題になったらしく、『新古今和歌集』の選者・藤原定家もこのことを自身の日記『明月記』に記している。その内容は衝撃的である。『明月記』の嘉禎元年（1235）6 月 6 日には、人づてに聞いた話として「持統天皇の遺骨を納めていた骨蔵器が銀製であったため、盗賊がこれを墓の外へ持ち出し、持統天皇の遺骨を路上に捨てて銀製骨蔵器だけを持ち去った」と記している。天武天皇の遺体は棺の中に白骨となって残っていたのが確認されているが、火葬された持統天皇の遺骨は路上に捨てられ、その後どうなったか分からない。なお、盗掘者は 2 年後に逮捕され京の街を引き回された。

⑦ 中尾山古墳

2020 年の発掘調査で、中尾山古墳は、墳丘は三段築成の八角形。対辺長約 20m、高さ 4m 以上。一段目、二段目は基壇状の石積みをもち、三段目は版築の盛土で整形されている。また、墳丘の外側には三重の外周石敷が巡ること、その対辺長は三重目が約 32.5m とわかった。

さらに、横口式石槨は凝灰岩や花崗岩の精巧な切石で築かれ、内法が約 0.9m 四方の規模をもち、内部に水銀朱が塗られていた。石室の側壁などには「竜山石」が使われ、表面は徹底的に磨かれ、赤色の顔料が塗られた跡があり、照明を当てると光り輝いたという。総量約 560t の石が古墳に使われ、延べ約 2 万人が築造に動員されたと推計されている。

1974 年の発掘調査以来、中尾山古墳は文武天皇（683～707 年）の火葬骨壺を葬った山陵（檜隈安古岡上陵・ひのくまのあこのおかのえのみささぎ）といわれていた。今回の発掘調査によってその可能性がさらに高ま

ったといえる。

八角形墳である段ノ塚古墳（舒明天皇陵に治定）や野口王墓古墳（天武・持統天皇陵に治定）では、八角形墳の隅角石は135度の角度をもつように丁寧な加工が施されていた。しかし、中尾山古墳の隅角石はそれらとはやや異なり、複数の石を組み合わせて135度にし、楕円形の石を配していた。こうした事実は飛鳥における文武天皇陵の性格について見直しを迫るものといえる。

⑧ 高松塚古墳・壁画館

直径23m(下段)及び18m(上段)、高さ5mの二段式の円墳。石室長さ265cm 幅103cm 高さ113cm。石室内には金箔張りの漆塗り木棺があった。

築造年代は、遣唐使が持ち帰ったと思われる銅鏡（隋・唐鏡）などから694年～710年の間と確定されている。

壁画の題材は人物像、日月、四方四神および星辰（星座）である。東壁には手前（南側）から男子群像、四神のうちの青龍、その上に日（太陽）、女子群像が描かれ、西壁にはこれと対称的に、手前（南側）から男子群像、四神のうちの白虎、その上に月、女子群像が描かれている。男子・女子の群像はいずれも4人一組で、計16人の人物が描かれている。中でも西壁の女子群像は（壁画発見当初は）色彩鮮やかで、「飛鳥美人」のニックネームで親しまれている。

天井画は、円形の金箔で星を表し、星と星の間を朱の線をつないで星座を表したものである。中央には北極五星と四鋪四星（しほしせい）からなる紫微垣、その周囲には二十八宿を表す。これらは古代中国の思想に基づくもので、中央の紫微垣は天帝の居所を意味している。

被葬者は、出土した被葬者の歯やあごの骨から40代～60代の人物と推測されている。天武天皇の皇子・忍壁皇子、高市皇子説が有力。しかし、決め手がない。

☆天武天皇の義理の弟（舒明と賀陽の采女との子、賀陽皇子）という説にも説得力がある。

《万葉歌碑》

立ちて思ひ 居てもそ念ふ くれなゐの 赤裳裾引き 去にし姿を 作者不詳

⑨ 文武天皇陵（栗原塚穴古墳）

文武天皇陵は、天皇陵であるため墳形、石室の形状も定かでない。文武天皇は、慶雲4年（707）に飛鳥岡で火葬されている。

⑩ 於美阿志神社・檜隈寺跡（国史跡）

祭神は阿智使主（あちのおみ）。東漢（やまとのあや）氏の氏寺の檜隈寺の跡地に鎮座している。重要文化財の檜隈寺址十三重石塔（上部が欠けている）が立っている。

渡来人が檜隈の地に住み移って来たのは、雄略天皇2年（475）、東漢氏配下の身狭村主青（むさのすぐりあお）、檜隈民使博徳（ひのくまのたみのつかい はかとこ）がはじめである。雄略8（481）、青と博徳は呉に渡り、漢織（あやはとり）・呉織（くれはとり）を連れ帰ったと出ている。

檜隈は明日香村の南側の狭い領域であり、渡来した阿智使主一族が高市郡に住んでいた所へ、身狭村主青、檜隈民使博徳が更に織機技術を持った者達を率いて、身狭村主青は少し北側の牟佐座神社のあたりを中心に居住し、檜隈民使博徳は檜隈を中心に居住したものと考えられている。

檜隈寺の伽藍配置は、中軸線が西方に振れ、塔を挟んで南に金堂、北に講堂が位置し、中門は西側に位置する特異なものであったことがわかった。塔跡の南方に位置する土壇は、三間四面の仏堂の跡。塔の西側に位置する礎石建物が、その位置や規模からみて中門であるとみられる。伽藍主要部は回廊で囲まれ、回廊の西辺に中門、南辺に金堂、北辺に講堂が位置し、回廊内の東寄りに塔が位置していたと、考えられている。

塔跡には心礎と四天柱の礎石が4つとも残り、講堂跡には瓦積基壇があり遺構の保存状況は良好である。社名が「於美阿志」なのか、また、地名の「檜隈」「檜前」「ひのくま」「日前」「日隈」が謎である。

⑪キトラ古墳・四神の館、壁画5面は、令和元年に国宝に指定されている

円墳。直径13.8m 高さ3.3m 石室長さ260cm 幅100cm 高さ130cm。キトラ古墳の築造は7世紀末～8世紀初頭頃と推定されている。

石室内には、四神、十二支、天文図、日月の壁画。四神は天の四方を司る神獣で、壁画は対応する方位に合わせて、東壁に青龍、南壁に朱雀、西壁に白虎、北壁に玄武が描かれている。高松塚古墳では、盗掘により南壁の朱雀が失われていたため、我が国で四神の図像が全て揃うのはキトラ古墳壁画のみ。

四神の下には、獣頭人身の十二支が描かれている。北壁中央の子から時計回りに、方位に合わせて各壁に3体ずつ配置されているが、確認できるのは、子、丑、寅、午、戌、亥の6体。

天井には天文図と、東に金箔で太陽が、西に銀箔で月が描かれている。この天文図は、赤道や黄道を示す円を備えており、本格的な中国式星図としては、現存する世界最古の例といえる。

また石室内からは、木棺の部材や飾金具、副葬品である刀装具、玉類などが出土している。木棺は漆塗りで、金銅製環座金具、金銅製六花形飾金具、銀環付金銅製六花形飾金具などの飾金具が取り付けられていたと考えられている。

太刀は、金線で直線とS字文を象嵌した鉄地銀張金象嵌帯執金具や、刀装具、刀身の断片がある。銀装の太刀は全面を黒漆で仕上げたもので、正倉院の太刀にも匹敵する優美なものであったと考えられている。玉類では琥珀玉やガラス小玉、径1mmほどのガラス粒がある。主な出土品は、重要文化財に指定されている。

石室内からは被葬者の人骨と歯牙も発見され、分析により50～60歳代の男性1体分とわかっている。

40～60歳の男性被葬者については「皇子説」と「豪族説」があり、696年に亡くなっている高市皇子（たけちのみこ：43歳没）と忍壁皇子（おさかべのみこ：40歳台没）という天武天皇の皇子で、豪族説では安倍御主人（あべのみうし、69歳没）が挙げられている。

高市皇子が火葬されたという記事が見当たらないこと、漆塗りの木棺、豪華な副葬品などから有力。

以上 文責 南 光弘

<ミニ歴訪&サロン>

檀原考古学研究所附属博物館「八雲立つ出雲の至宝」特別展に行ってきました

小笠 浩二

6月3日、檀原考古学研究所附属博物館へ行って来ました。参加人数は7名でした。前回の企画でも、ここに来られたみたいなので今回少ないのかと思います。私は、初めて参加させてもらいました。当日は小学生の団体が来られていて沢山の展示物を実際目にして歴史の勉強になるだろうし、恵まれた環境だと思います。エントランスに入って巨大な石造物がありビックリです。飛鳥京跡の「流水施設」と「石槽」でした。

この附属博物館は、2018年12月から大規模施設改修を行い2021年11月にリニューアルオープンしたそうです。春季特別展として「八雲立つ出雲の至宝」展をやっていました。2021年3月に出雲歴史博物館で「しきしまの大和」展を開催され大和の考古学を紹介してくれた返礼として、今回島根県の考古資料を展示、紹介する展示会を開いたと言う事です。

国宝の島根県荒神谷遺跡出土品の銅剣、銅矛、加茂岩倉遺跡出土品の銅鐸、重要文化財のかわらけ谷横穴墓出土品、また太刀、埴輪など



島根県の貴重な文化財が所狭しと展示されていて、多くの作品が奈良県初出展だそうです。

出雲と大和では栄えた時期が異なりますが、大陸からの影響や時代による移り変わりなどを見るのも面白いですし、断片的な情報から想像を膨らませるのは、ロマンがあって楽しいです。



今回印象に残っているのが、平所遺跡から出土された重要文化財「見返りの鹿」で、どこか他の出土品とは一線を画していて優雅さが感じられました。

写真では見た事がありましたが、実際目になると実感がわきます。

常設展は、第1展示室「旧石器、縄文、弥生時代」、第2展示室は「古墳時代」第3展示室は「飛鳥、奈良、平安、室町時代」の展示と、時代を系統的に時間軸でまとめています。古墳時代に入った所にメスリ山古墳出土の日本最大級の円筒埴輪を展示してあり圧倒されました。

時間があったのでこのあと、近くの今井寺内町を歩きました。16世紀の中頃、今井兵部が四方に濠をめぐらして防備を固め寺内町を形成しました。また家並みが素晴らしく昔の雰囲気漂わせる民家が沢山あり、久宝寺の寺内町より立派ですね。街並みは規制されて見どころはありましたが、その住人と、ひと悶着ありガッカリさせられる場面がありました。紙面の関係上詳しい事象を書くことは省きます。



以上

＜お知らせ＞

☆2022 年度総会と歴史講演会のご案内

1. 日 時 7月27日(水) 午後1時に東大阪市立埋蔵文化財センター(近鉄瓢箪山駅 南へ800m)にご参集ください
2. 内 容
 - ・午後1時から1時30分 東大阪市立埋蔵文化財センター館内見学
展示品、土器、特別展示の阿弥陀如来像。行基菩薩坐像
*見学の後、近くの四条リージョンセンター(やまなみプラザ)大会議室へ移動
 - ・午後1時50分から3時20分まで講演会
講演テーマ「東大阪の古墳時代」 講師 菅原章太氏
 - ・講演会の後、同じ場所で総会を開催いたします。

☆2022 年度 古代史講座

第3回 6月25日(土) 午後1時20分～

会場 東大阪市立社会教育センター2F集会室

講師 内倉 武久さん

テーマ「大宰府は日本の首府だった」

第4回 7月23日(土) 午後1時20分～

会場 大阪商業大学 谷岡記念館内 多目的室(小阪駅下車、北東へ300m)

講師 保井 温さん

テーマ「住吉明神と日本の古代史」